



みんぐくふくろう民放史

題字 中川 順

TKUテレビ熊本報道編成制作局
報道制作部 酒井 麻衣

「おどんま盆ぎり、盆ぎり、盆から先や…」、1966年、五木の子守唄の古里がダムに沈むという計画が発表されたとき、あの秘境がと驚いた人は少なくないでしょう。

反対訴訟は84年に和解が成立。村人たちが古里を離れ、あるいは高台の代替地に移るなか、水没予定地に残り先祖の土地を守り続ける一軒の老夫婦がいました。

この老夫婦の日常を描いた番組は09年、日本民間放送連盟賞優秀賞。ギャラクシー賞上期テレビ部門入賞。

「ダムが建設されれば水没する土地を耕す夫婦の生きざまをゆつたりと描いた秀作。老人が日々の暮らしから紡ぎ出した言葉が輝いている」(ギャラクシー選評)。

『みんなで語ろう民放史』は、この番組の現役ディレクターの取材日誌です。

(編集委員会)

「おどんま盆ぎり、盆ぎり、盆から先や…」、1966年、五木の子守唄の古里がダムに沈むという計画が発表されたとき、あの秘境がと驚いた人は少なくないでしょう。

反対訴訟は84年に和解が成立。村人たちが古里を離れ、あるいは高台の代替地に移るなか、水没予定地に残り先祖の土地を守り続ける一軒の老夫婦がいました。

この老夫婦の日常を描いた番組は09年、日本民間放送連盟賞優秀賞。ギャラクシー賞上期テレビ部門入賞。

「ダムが建設されれば水没する土地を耕す夫婦の生きざまをゆつたりと描いた秀作。老人が日々の暮らしから紡ぎ出した言葉が輝いている」(ギャラクシー選評)。

『みんなで語ろう民放史』は、この番組の現役ディレクターの取材日誌です。

『土に生きる(ダム水没予定地のある農民の手記)』を制作して川辺川ダムをテーマに番組を作つてみないか?」上司から、そう話があつた時、正直、戸惑い、「はい」と即答することはできませんでした。

40年以上の、糺余曲折の歴史を背負い、県政最重要課題と言つても過言ではない川辺川ダム問題。全国的にも「東の八ツ場、西の川辺」と称されるほど、有名なダムです。また、TKUでも、川辺川ダムをテーマにした番組は過去に何本も制作されています。そんな中、入社十年目の若輩者がこんなに大きなテーマに向かつていけるのか、どこまで取材し、掘り下げることができるのか、不安に駆られたのです。

しかし、一方で、川辺川ダムは元東大教授の蒲島知事が「有識者会議」を立ち上げ、建設の是非を判断するという、ちょうど節目の時を迎えていました。「この節目の時に、番組を作ることができるなんて、またとないチャンスかもしれない」そう思い、この番組制作の話を受けるという「苦渋の決断」

をしました。

そして、平成20年7月末から月に二～三回のペースで球磨郡五木村通りが始まりました。同じ熊本県内とは言え、局から五木村までは車で片道二時間半、往復五時間。普段は県政担当をしていたので、日々のニュース取材をしながら、ドキュメンタリー取材にあたるというのは、なかなか大変なものでした。

なぜ水没予定地を離れない

その理由を知りたい

私は村のダム水没予定地に一組の夫婦が残っていることはこれまでの新聞報道などで知つてはいましたが、「なぜこんなに不便なところに残っているのだろう?」、単にダム建設反対の意思表示だろうな、最初はその程度にしか考えていませんでした。

しかし実際に、その夫婦・尾方茂さんに会い、話を聞くうちに、それは私の勝手な思い込みだったことがわかりました。

尾方さんのダム建設に対するスタンスは「できることなら、ダムはできない方がいい」というくらいのもので、積極的なダム反対で

はありませんでした。

それでは、なぜ尾方さんはダム水没予定地を離れないのか、その理由を知りたいと思うようになります。



土に還りたいと語る尾方さん

ほこりをかぶつた 尾形さんの手記に出会う

そんな中で出合つた尾方さんの手記。尾方家に長年、県外から通つてゐるある女性がその存在を教えてくれたことがきっかけでした。

日記や手記の類というのは、

まり人には見られたくないもので

手書きのものもあればワープロ

で打ち直したものもありましたが、一度使つたメモの裏を使つたものなど、その辺に置いてあつたら捨

ててしまいそうな紙切れ同様のようものがほとんどでした。

しかし、そこにある言葉たちは力強さを持っていました。一日中

畑の手入れをし、その恵みを受け

るという農民・尾方さんの生活は

单调過ぎるほど单调なものです。

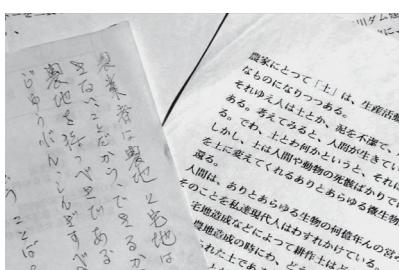
手書きのものもあればワープロで打ち直したものもありましたが、一度使つたメモの裏を使つたものなど、その辺に置いてあつたら捨ててしまいそうな紙切れ同様のようものがほとんどでした。

しかし、そこにある言葉たちは力強さを持っていました。一日中畑の手入れをし、その恵みを受け

るという農民・尾方さんの生活は单调過ぎるほど单调なものです。

に話をしてもらい、手記を見せていただくことに成功しました。部屋の奥から引っ張り出してきた、ほこりをかぶつた封筒から出てきた数々のメモ。

農作物を生む土への感謝 先祖への畏敬の念い



尾方さんが書いた手記

そこで、その女性から尾方さん

しかし、そこには農作物を生み出してくれる土、そしてその土を守つてきた先祖への畏敬の念といった、私たち現代人が忘れかけた、強い思いが綴られていました。私はすぐにこの手記を柱に番組を構成しようと決めました。誰かに伝えようと、手記に残してはいたものの、誰に見せるでもなく封筒にしまつていた、その尾方さんの思

いを多くの人に伝えたい。そして、なぜ、尾方さんが水没予定地を離れられないのか、その本当の理由を番組を通して知つてもらいたい、



五木村頭地地区の眺望

子守唄の里として知られる五木村。この村の中心地、頭地地区には十年足らずのうちに新築の住宅群が一挙に誕生した。ダムの水没予定地から高台の代替地に移転した人たちの住宅だ。

「土なしには人間生きていかれん」と。じやつで土ば大切にせろって言いよつたですたい。父も母も言いよつた」：尾方茂さん81歳。

放送は平成 21 年 5 月 28 日



スイカに網張りをする尾方さん夫婦

尾方さんは桃元にメモどへンを置いておき、その日に思つたことを寝る前に手記にしたためてきた。ワープロで打ち直すこともあつた。

「農家にとつて「土」は、生産活動の基本。だが現代の私たちの暮らしは、どんどん土と疎遠なものになりつつある。それゆえ人は土とか、泥を不潔で、厄介なものとうくらいいにしか考えていない趣きがある。考えてみると、人間が生きていく上で必要な衣食を産み

ダム水没予定地で生まれ、ずっと
ここで暮らしてきた尾方さんは周
りの人たちが代替地に移った今も
移転を拒み、77歳の奥さんちゆき
さんと二人、昔ながらの畠仕事を
続けています。

だしてくれるものは土である」(毛記・原文のまま。以下同じ)

中。国と県は村の年間予算の約30倍にあたる村作り予算を提示。やがて村は下流の治水対策と村の振興を説く国や県の説得に応じた。苦渋の選択だった。ところが、没地の地権者がダム計画取り消しの裁判をおこし、農家がダムの農業用水はいらないと裁判をおこすなどし、ダム計画から43年が経つた現在もまだ、ダム本体の工事は着工されていない。

尾方さんは代替地ができるまでに50アールの畠を持っていた

尾方さんの家の前を流れる川辺川は全国に知られた清流で、アユも獲れる。その川辺川が流れ込む球磨川は日本三急流の一つで、昭和38年から40年まで三年続けて大水害が起きた。特に昭和40年7月3日の「7・3水害」は被害が大きかった。その翌年、国は球磨川上流の最大支流・川辺川にダムを造る計画を発表。これが「川辺川ダム」だ。

はじめ村の中心地が水没するダム計画に村は反対する。しかし、当時日本は高度経済成長真っただ

（土地が変わったということを先祖に報告する意味でですたい（新しい畑に）まこうかと。私自身の畑よりも先祖が残してくれた土地ですけん。それだけのことをするぐらいの気持ちを持たんといかんとやなかでしようか」畑を手放す際に尾方さんは国と確約書を交わしている。国が代替地に新たに農地を作つたらそのうち50アールを尾方さんに適正な価格で譲渡するという内容だ。しかし話は進んで



手放した畠の土を見せる屋方さん

おらず、尾方さんは確約書通り国が烟を準備してくれるまで、今の土地を動かないつもりだ。

「土地を持ちながら、それを賣らねばならぬ国のやり方、そしてその爲に生活ができず五木を出でいかねばならぬ。百姓のかなしさ。國は百姓に何をせよと云うのだらうか?」

(手記)

川辺川ダム建設計画にダム推進の立場をとり続けてきた歴代熊本県知事。しかし、平成12年、熊本県初の女性知事、潮谷知事はダム推進の立場から一転、中立路線をとつた。そして平成20年、前述のように元東大教授の蒲島学者知事は「有識者会議」を立ち上げ、その判断を踏まえて知事としての姿勢を、就任から半年後に表明すると公約。翌年9月、県議会で蒲島知事はこう述べた。「現行の川辺川ダム計画を白紙撤回し、ダムによらない治水対策を追求すべきであると判断したことを表明します」。

歴代熊本県知事初のダム反対表明だつた。

水没予定地には尾方家の墓だけが残された共同墓地がある。ここに眠る尾方さんの父・乙平さんは50年ほど前、墓地の周りにたくさん

の桜の木を植えた。しかし、四年前、尾方家以外の墓が移転する際、この桜の木が切られた。地区

(手記)

りとあらゆる生物の何億年の営みの中で生かされているのである」

(手記)



切られた桜の木を見る尾方さん



少年尾方さんとアサノさん



祖母・アサノさん

う。しかし、尾方さんはそれが辛かつたとは思っていない。「昔はみんなでしょったから張り合いがあつたでな。隣近所と話し合ってから、今日はあそこに手伝いにいこうとか何とかいうことはあつたでな。今はもう、そういうことがなくなつてしまつたもんでな」

11月下旬、五木村で毎年恒例の「子守唄まつり」が行われた。

一年のうちに村がもつとも賑わう催しだ。また、この日の夜には、花火大会が村を沸かせた。しかし、尾方さんは花火があまり好きではない。「あの花火だけでも何百万とゆう金が掛つたであらうに土地を捨て農地を手放して出でいつた人達のことを思う時、私には、てば止める板が運ばれてくるまで自分の体で土を止めたという。

「私は家を守る為には先代が残してくれた土地は一坪たりとも手放してはならないと思つてきた、父母の苦労、先祖の汗がいっぽいはいつた、山であり畑である」

実りの秋。尾方さんはソバやサツマイモを収穫した。昔、食べ物のない時代には近所の人から作物を分けてもらうこともあつたとい

の同意はとられていたものの、尾方さんは「桜の木が切られることは知らされていなかつた」と今でも憤りを感じている。

それでも桜からは孫生えがいくつも芽を出し、青々と葉を茂らせている。

「土とは何か」というと、それは人間(動物)の死骸であるということを。しかし、土は人間や動物の死骸ばかりではない。ありとあらゆる植物、鉱物、動物の死骸を土に変えてくれるありとあらゆる微生物が生息している。その微生物の死骸がまた土に還る。人間はあ

りとあらゆる生物の何億年の営みの中で生かされているのである」



花火を見る尾方さん

もなく消えてゆく、五木村の将来を見たような気がした」（手記）



尾方家年越し

離れない尾方家、周りとの付き合いも減り、年々さびしくなつていのだった。

直会も、今では一つにまとまり、

祈祷が行われた。これまで地区

ごとにそれぞれの集会所で出来た

新築の伝統文化伝承館で行われて

いる。代替地で暮らす人々はこう

話す。「昔は励まし合い助け合いでな、仲良くしよつたつたないな」「近所付き合いが難しくはなつて

きたですよね。気軽に戸が開いて

いない」

例年より開花が早かつた五木の桜。墓地の桜もきれいな花を咲かせた。その桜を見上げて尾方さんはこう語った、「いつまでも親が桜

を植えてくれたつだなつていつも

いない」

12月、年の瀬が押し迫ると尾方一家も忙しくなる。豆腐作りにモチ作り、年越しソバも毎年、収穫したソバをひいて作る。尾方さん夫婦は「病気もせずに過ごせてよかったです」と一年を振り返る一方で、こう話す。「二人元気でいる時にはよかですばつてんな、独りになつてからが」。「やつぱお互ひに心配は、しどつですよ。今まで大した病気もせずにですが、過ごしたばつてんか、今度の年どぎやんなつどかて思うですよ。元気で過ごされればよかばつてんですね」。水没予定地にあつた神社も代替地に移つた。たつた一軒、水没予定地を

離れない尾方家、周りとの付き合いも減り、年々さびしくなつていのだった。

還りたい。それが尾方さんの願いなのだ。

八十八夜の日、尾方さん夫婦は茶摘をした。二人で一年分のお茶を作るのだ。



茶摘み

スタッフに感謝！ 苦労だが面白い番組制作

一時間番組の制作は全く初めて。実務的には構成、編集作業など周囲のスタッフがいなければ何もできなかった状態でした。紙面の都合でスタッフの方々のお名前をご紹介することができませんが、プロデューサー、構成作家、カメラマン、エディター、ナレーター、すべて

月並みですが、今回この番組制作を経験して、制作の苦労の一方で、そのおもしろさを改めて感じることができましたし、決して楽すればきれいいかつて言わすとばつてん、私はそうも思わん。土に還ればやっぱそれだけその付近の肥やしになつでな、それまでために

そしてなんと、番組は、民放連賞、ギャラクシー賞上期入賞の栄誉に加えて、番組ナレーションがFNS系列アナウンス大賞も受賞しました。これらは、すべてスタッフのおかげで、「酒井の番組が賞をとつた」と言われることに、多少の違和感も感じているほどです。とともにかくにも、単に華やかなテレビ業界への憧れだけでこの世界へ飛び込んできて、体力と根性だけで、ここまでなんとか十年やつてきたというような私に、この素晴らしい賞までいたくことになります。この場をお借りしてスタッフの皆様にお礼を述べさせていただきます。本当にありがとうございました。

《写真提供 TKUテレビ熊本》